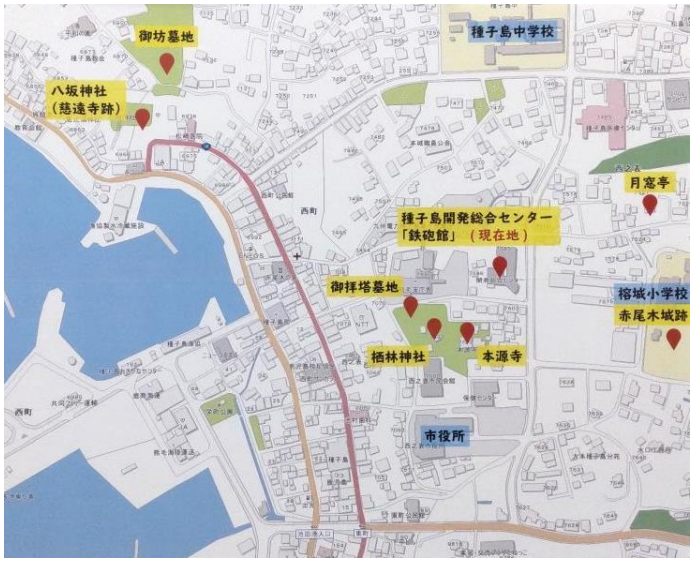
種子島の石塔展（せきとうてん）

企画展

2021年4月7日(水)～5月5日(水)
於:種子島開発総合センター「鉄砲館」

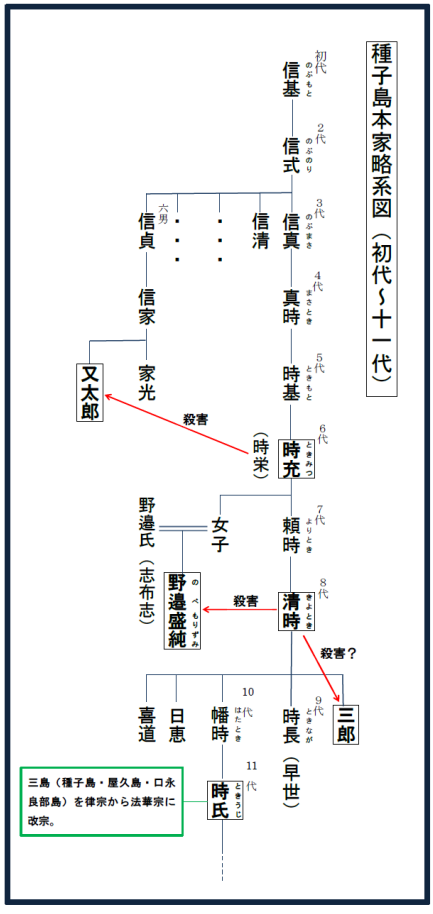
本企画展では、「御坊墓地」と「御拝塔墓地」、２つの種子島家墓地を中心に、種子島の歴史を紐解いていきたいと思います。長い年月、静かに佇んできた石塔たちが、私たちに何を物語るのか。石塔の声に耳を澄ましてみましょう。

御坊墓地



「御坊墓地」は種子島家の最初の墓地で、種子島家の島主が代々祀られていました。万延元年（1860年）、松寿院※1は御坊墓地の整備に着手し、被葬者不明の墓は本源寺（種子島家の菩提寺）の僧侶に籤を引かせて誰の墓とするかを決めました。現在「御坊墓地」には、全部で18基の墓が祀られており、豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍した第16代久時や、鉄砲伝来時に島主であった第14代時堯の墓などがあります。

※1…23代久道夫人。25代久尚が幼少の頃、名代として政治を執り行った。



●南北朝時代の骨肉争い

南北朝時代、種子島家ではたびたび家督争いが起こりました。

又太郎の墓

①又太郎の暗殺…６代島主時充が、一度家督を譲ると約束した又太郎を暗殺。現在又太郎の墓は、御坊墓地の片隅に建てられています。

②野邉左衛門盛純の殺害…８代清時が家督を継ぐ前、叔母の子にあたる野邉左衛門盛純が祖父に大変気に入られたことに腹を立て、盛純を殺害。清時は数年種子島を離れて過ごした後に帰島し、家督を継ぎました。⇒２ページへ

③三郎の殺害…８代島主清時の嫡男・三郎は「為人暴悪にして家を嗣ぐの器に非ず」ということで馬毛島で殺されました。⇒４ページへ

●律宗時代の種子島

11代時氏が種子島を律宗から法華宗に改宗する以前、中世の種子島がどんな様子だったのかということは、あまり記録が残っていません。しかし、じつは石塔がその時代の謎を解くヒントを与えてくれます。

御坊墓地には花崗岩製の石塔が２基残されています。６代時充夫人の墓とされている五輪塔※2（写真右）と７代頼時の墓とされている宝篋印塔※3（写真左）です。種子島では花崗岩は産出せず、おそらく関西から搬入された石材であると考えられます。関西産の花崗岩製の石塔は鹿児島県内でも珍しく、志布志市で３基報告されている程度です。

また『種子島家譜』の記録によると、８代清時に殺害された野邊左衛門盛純は、志布志から種子島にやってきた人物でした。このことから、種子島家と志布志の野邊家は婚姻関係を結ぶほど密接な間柄だったことが伺えます。

これらのことは、中世に関西～志布志～種子島を結ぶ航路が存在したことを示しているのではないでしょうか。そしてその航路を利用することで、種子島は離島という環境にありながら、進んだ文化を関西地方から取り入れることができたのです。

御坊墓地や御拝塔墓地の大型五輪塔が、奈良県西大寺（真言律宗）を起点に全国へ拡大していった「西大寺様式の五輪塔」の影響を受けていることからも、それが裏付けられます。

西大寺様式の大型五輪塔

（御拝塔墓地）

さらに関西産花崗岩製の五輪塔がある志布志市宝満寺からは、南西諸島に分布するカムィヤキ陶器も出土していることから、当時の航路は種子島からさらに南へ繋がっていたと考えられます。

以上の事から、進んだ文化を持つ近畿地方と南西諸島の中間に位置する立地と航海技術を駆使して独自の経済・文化を発展させた、律宗時代の種子島の力強い姿が浮かび上がってくるのです。

※２…五輪塔は、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪と呼ばれる５つの部材からなる石塔。鎌倉・室町時代に入ると武士の墓にも用いられるようになります。仏教の様々な宗派で用いられます。

※３…宝篋印塔は古代中国に由来し、日本では鎌倉時代中期以降に造られ始め、石塔の中では五輪塔に次いで数が多い種類です。江戸時代以降、島津家の歴代当主の墓に用いられ、御拝塔墓地の石廟の中にも小型の宝篋印塔が納められています。

御 拝 塔 墓 地

御拝塔墓地は 11 代時氏が創設して以降、種子島家一族の参り墓※4 として大切にされてきました。現在 70 を超える石塔が建っていますが、その全てが誰のお墓か判明しているわけではありません。被葬者不明の石塔の中には、島主の墓と思われる立派な宝篋印塔も含まれています。

じつは、8 代清時と 11 代時氏のお墓が判明していないので、どれかがこの２人のお墓なのかもしれません。

※4…遺体を実際に埋めた場所に建てるお墓を「埋め墓（捨て墓）」、それとは別の場所にお参りするために建てられるお墓を「参り墓」といいます。

●島津家との深い繋がり

江戸時代に入り、18 代久時が薩摩藩の家老となり頭角を現すと、その職を 19 代久基がそのまま引き継ぎました。これを踏まえて御拝塔墓地の墓石を見てみると、久基以降の墓石はそれぞれ区画を持ち、立派な石廟形の墓を建てるように変化したことに気が付きます。この石廟形の墓石は、県本土に点在する島津家分家や有力家臣一族の墓地に見られます。島津家の家老として多くの時間を鹿児島で過ごした久基が、鹿児島で立派な石廟形の墓を目にし、これを種子島に持ち込んだものと考えられます。

25 代久尚夫人墓の島津家家紋
（垂水島津家 島津貴典の五女）

また、島津家と種子島家の結びつきは、島津家の姫君を正室として迎えるなど婚姻関係を結ぶことで、より強固なものになっていきました。島津家出身の夫人の墓を御拝塔墓地で見てみると、島津家の家紋があしらわれ、石材も非常に良質で風化に強い石材が使用されています。現在の状態を見比べてみると、島主の墓より夫人の墓の方が状態が良く、使用した石材の差が一目瞭然です。このことから、当時の武家社会においては、夫人の家柄が非常に重要であったことがよく分かります。

19 代久基の墓（右）と久基夫人の墓
（夫人は薩摩藩２代藩主 島津光久の十四女）

福昌寺型宝篋印塔
写真左：御拝塔墓地（被葬者不明）
写真右：島津義久墓（福昌寺跡／鹿児島市）

また、種子島家と島津家の結びつきの強さは、宝篋印塔の形式にも表れています。鹿児島県内には様々なタイプの宝篋印塔があり、その多くは地域性として捉えられますが、立地的に隔絶されている種子島の宝篋印塔は、①基礎・塔身が方形②笠の隅飾と軒の間に段がある③隅飾が２弧である等の特徴が一致することから島津本家と同じ「福昌寺型宝篋印塔」に分類されます（脚部を持つのは種子島独自の特徴）。このことは、近世の種子島が、島津本家と同じ文化圏に属し、かつ密接な関係を築いていたことを表しています。

島 内 の 石 塔

石塔位置図

種子島島内には、「御坊墓地」と「御拝塔墓地」以外にも、個性的な石塔が数多く存在します。その中でも特に見ていただきたい石塔をご紹介します。

① 西村家の墓

南種子町西之の本村公民館裏に、天正８年（1580 年）と刻まれた西村家の墓があります。この西村家とは、天文 12 年（1543 年）門倉岬に唐船が漂着し鉄砲が伝来した際、最初に乗組員に応対したとされる西村織部丞を輩出した家です。時代的にも近く、鉄砲伝来当時の息吹を感じさせる石塔です。

② 大塚山の石塔

文明元年（1469 年）11 代時氏が、種子島全島を律宗から法華宗に改宗しました。この時島間の地頭であった大塚氏は、改宗に従わなかったため、竹のこぎりによる首切りの刑に処されたという伝承が残っています。この石塔は、悲惨な最期をとげた大塚氏の御霊を供養するために建てられたとされています。

③ 広田の石塔

南種子町の「広田遺跡ミュージアム」近くに、五輪塔の部材が土に埋め込むように祀られた石塔山と呼ばれる場所があります。ここでは毎年 8 月 15 日に「石塔祭り」※5が行われています。中央の「御高祖（オコーソ）」と呼ばれる石塔は祖霊を共同で祀るもので、周辺の石塔は氏族ごとの祖霊を祀るものです。石塔祭りは、法華宗の行事として広田以外の集落でも行われています。

※５…「広田の石塔祭り」は、南種子町無形文化財に指定されています。

写真左：御高祖（オコーソ）
写真右：各氏族の石塔

≪番外編 ④ 馬毛島・王籠の石塔≫

８代清時の嫡男・三郎は家を継ぐ器ではないということで、家臣らによって馬毛島で殺害されました。馬毛島の王籠には、三郎の霊を慰めるために建てられたとされる石塔群があります。今も吹き寄せる砂に埋もれながら、三郎の霊を慰めていることでしょう。

（文責：種子島開発総合センター「鉄砲館」）